

宮廷社交から現在に至る英仏両国における 紅茶による社交文化様式の変遷

Transition of the style of making tea in Britain and France from court social intercourse to the present

土 井 茂 桂 子

キーワード：宮廷、社交、紅茶

はじめに

嗜好品である茶は、それぞれの国で社交のキーアイテムとして用いられ、生活文化様式に様々な影響を与えている。

主に紅茶を嗜む文化が醸成された英国、コーヒーが紅茶よりも用いられてきたフランス。そもそもなぜ英国で紅茶文化が開花し、フランスでは紅茶ではなくコーヒー文化が醸成されたのか。現在その両国間において、英国ではコーヒーの消費量が上がり、微増ではあるがフランスでは紅茶の消費量の伸び率が上がっている。

この背景にはいったいどのような仕掛けがあるのか、また、どのような歴史的文化的慣習要因が絡んでいるのか。その点を踏まえ、現在の英・仏の紅茶を用いた贅沢な時間“アフタヌーンティー”と“サロン・ド・テ”の潮流の奥にあるものを解いていきたいと思う。

茶のきた道

茶は中国南西部雲南省と貴州省をまたぐ山岳地帯を原産とし、薬効が知れ渡り、諸国に広まっていたとされている。西には陸路・海路を経て伝わり、陸路をそのルーツとするものは広東語系の「CHA」が、海路をその伝播ルーツとするものは福建語系の「TE」用いられているのはつとに知られたことである。

一般的に、ヨーロッパに初めて茶がもたらされたのは17世紀初頭、オランダ東インド会社によってとされているが、それは商業的にもたらされたという意味であり、茶はすでに16世紀初頭にはポルトガルには伝わっていた。

では、なぜ、ポルトガル人はオランダ人よりも100年も前に茶の存在を知り、愉しんでいたにもかかわらずそれを商業化しなかったのか。それには二つの状況が絡んでいると考えられる。

まず、宗教的な点。同じキリスト教であってもオランダ人はプロテスタントであるのに対し、ポルトガルはカトリック。前衛的というよりむしろ、異文化の持つ趣を尊ぶ気風を一部の上流階級の特権として守りたいという保守的な独特のとらえ方があったと考えられる。オランダはプロテスタントであるので、新しいものの伝播を商いという観点から捉えたが、ポルトガルは「広がり」というより「嗜み」という位置に留めたかったきらいがある。また、もう一方で、ポルトガルに茶が入ってきたのはルネッサンス期であったので、芸術文化、趣味の領域として純粋に東洋の茶の文化を、王侯貴族・豪族の優雅な嗜みとして位置づけたかったということではなかろうか。

王室での展開のくだりは後に述べるとして、広がりこそ見られなかったが、ポルトガルの地によって育まれた茶の嗜みの文化は広く茶が欧州で知られるようになる時点で、もうすでに100年の時を経ている。ポルトガルで文化醸成されたものとしてキャサリン・ブラカンザのイギリス王室への興入れによって茶は更なる展開をみせ、その後18世紀にはオランダの商業主義とポルトガルの文化醸成趣味とが相まってイギリスでは広く飲まれるようになるのである。

コーヒーのきた道

コーヒーに関しては様々な原産地説があるがエチオピア、イエメンあたりという説が根強い。コーヒーはまず、イスラム社会で用いられるようになり、浸透し、その後、ローマ教皇クレメンス8世（在1592-1605年）の認可のもとキリスト教社会にも用いられ、広がりを見せて行った。

英国やフランスでは紅茶より先に浸透し、英国ではコーヒーハウスが情報交換や様々な意見交換の場としてにぎわいを見せ、フランスでは街場のカフェがそれぞれの分野の人間のたまり場として哲学的エスプリのきいた味わいを見せるように男性を中心とした文化醸成の場として台頭していたのである。

薬としての嗜好品 見せびらかしの嗜好文化

広辞苑によると嗜好品とは「栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物。茶・コーヒー・タバコ・酒の類」とある。

現在、広く五大嗜好品として認知されているのは茶・コーヒー・チョコレート・酒・タバコである。あいにく、タバコは他の四つの嗜好品と違い、抗酸化作用があるとか抗菌作用があるといった身体に有益な作用が見られないので、そのおかれている状況は非常に肩身の狭いものとなっているが、その他の嗜好品の材料である植物成分は古代から摂られ、今もその成分は多くの薬品に取り入れられているということから、これらは薬としての効力を期待されてきたものであることがわかる。つまり、根本的には他の動植物摂取の主たる目的である〈体の健康〉に大きくかかわる、栄養における健康維持や空腹を満たすという役割は殆ど期待されるも

のではなく、快楽や苦痛を回避する〈心の健康〉に大きな期待が持たれた薬効をもったものとも理解できる。

嗜好品はこのように薬という観点も持ち合わせている性質上、これを摂りすぎると逆に身体に大きな有害作用をもたらす毒ともなりうる危険性があるともいえる。実際、英国を除く多くの欧州各国ではこの薬用的要素が逆にとられて、「茶は身体によくない」と批判された時代があった。勿論この背景には様々な思惑が絡んで故意に悪評が流されたという事実やその時代の風潮があったとはいうものの、程よい嗜みこそが本来的な薬効をもたらす、〈心の健康〉に有用に働くというのが嗜好品のあり方であろうから、その摂り方には個々人のバランス力、賢明さが試されているともいえよう。

では、なぜ、これらに人々はお金をかけ、その周辺環境に工夫を凝らすのか。

これには欧州の王侯貴族たちの摂取様式が大きく関係しているといえる。

そもそも嗜好品は〈体の健康〉とは直接的に関係しないのであるから、庶民にとってその摂取の優先順位は自ずと低くなる。さらにコーヒー・茶・チョコレートの類は自国で生産できるものではなく、かつ、消費量に爆発的期待をあえて持たず、量産態勢に移行することがない以上、特別にそれを欲する者のみを対象として供給されるので、高値で取引される。つまり、限られた特権階級消費物としての地位が確立するわけである。

特権階級に属するものなら、なおさらそれを強調し、特権階級者はそれぞれのステイタスを堅持し、彼等の中でもお互いに張り合うことで、その周辺環境には様々な付加価値が加わり、独特の様式が確立していったともいえよう。

それらを喫する環境の背景には王侯貴族の威風をなびかせるための、見せびらかしの文化が呈されるのである。

ことに茶の起源は欧州より遙か彼方のファーイーストである。コーヒーやチョコレートといった他のどの嗜好品よりも遠い国から運ばれてくる異物（偉物）なのであるから、それを手に入れ喫するステイタス、そのステイタスを演出するには周辺物はなおさら凝りに凝ったものとなり、特別な物を選び、生み出すようになる風潮が生まれたのである。

先にあげたポルトガルの茶の用い方が正統派であるかのように、こうして、他の嗜好品とはニュアンスを異にする、「茶」の文化の王侯貴族的イメージが確立されていったともいえよう。

日本における紅茶の潮流

日常、茶といえば未発酵茶を常用する日本人にとって、同じカメリアシネンシスであっても紅茶は少し異なるものという受け入れ方をされてきた。それは紅茶にそもそも輸入制限がかけられていたこととも関係付けられる。

1971年（昭和46年）の輸入自由化がなされるまで、もしくは、自由化されて暫く年月を経るまで、紅茶は高級贈答品としてその地位を確立してきた。それまで輸入制限がかけられていた

ことにより、異国的妄想が自然と高まり、断片的に伝え聞き（見知り）広くイメージされている紅茶の嗜み方が、英国の上流階級の生活ぶりを彷彿とさせ、異国情緒を醸し出す品として認知されていたのであろう。それを喫することが日常生活に付加価値を添えるかのように思わせてくれるアイテムとして重用され、それを贈ることは相手を尊ぶ品格であるかのように思われていた節が過去の紅茶贈答セットの梱包アイテムからも見て取れる。

茶はもともと中国の南西部ミャンマー国境付近が原産とされるアジアのものである。しかし、元来オリエンタルなものであるはずの茶が、“紅茶”に限って、“舶来もの”……実際世界三大紅茶はダージリン（インド）、ウバ（スリランカ）、キーマン（中国）で何れも生産国はアジアであるにもかかわらず……としてわが国に迎え入れられたのは、先にも少しあげたように、日々口にしてある茶の類と発酵段階が違うものとしてのインパクトの強さ、また、初めて輸入された時期、輸入制限、欧州の喫茶文化風習のイメージも相まっていたことであつたといえよう。

明治天皇がコーヒーを日常的にお召し上がりになったという記録が残っているが、日本で初めて紅茶が輸入されたのは1887年（明治20年）。同じ年に明治政府の肝入れで輸出品として研究が進められていた日本産の紅茶の初めての輸出もされている。

しかし、この頃まだまだ紅茶の自国での浸透はほど遠く、20年余の時代を経て、1906年（明治39年）英国からリプトン紅茶が輸入されてから上層階級に徐々にその存在が認識される様になった。だが、浸透度は未だ低く、ようやく1927年（昭和2年）日本発の国産ブランド（現・日東紅茶）が立ち上がるようになり、一般上流家庭から次第に紅茶が飲まれるようになってきた。ただ、1971年（昭和46年）の紅茶の輸入自由化までは高級品としてのイメージが醸し出されたプロモーションが主で、積極的に様々なプロモートが図られるようになるのは自由化以降である。

現在の10代20代前半の若者に、「紅茶が高級品か」と問うと、「否」という答えが多く返ってくる。と同時に、紅茶というと紙パックの甘味入り紅茶系飲料をまずはイメージし、安価な飲み物という感じがするという答えも数多く返ってくる。一方で茶葉から入れる紅茶は「上流階級」「女王・王女」「気取った」「裕福」という言葉を連想させるという意見も多く、高級ティーサロンやそれぞれ工夫を凝らしたこだわりの紅茶店から街場の喫茶店、また、コンビニエンスストアで買い求めたり、家庭で様々な楽しみ方をしたり、摂取・嗜み方法も多種多様な広がり方をみせている。

日本では舶来的イメージはもはや、なりをひそめているが、それでもなおティーサロンが貴族的趣を湛えるのは歴史的背景の影響を受けているからにはほかならないといえる。

英国の紅茶とコーヒー文化の外郭

英国紅茶文化の立役者としてキャサリン・ブラカンザ、メアリー2世とその妹のアン王女、

アンナ・マリー・ベッドフォードという女性の名がしばしば上げられる。

度々名を挙げるキャサリンはポルトガルからチャールズ2世に1622年に嫁ぎ、その際に持参金代わりにインドのボンベイと喫茶・喫茶道具一式、砂糖等を持参し、英王室に喫茶の風習をひろめた。キャサリンの輿入れにより、宮廷貴族と富裕階級の生活に茶が定着し、高価な茶に贅沢品の砂糖を入れて喫茶を楽しむことが一種のステイタスシンボルとなっていった。1680年にはイギリス東インド会社が中国から直接茶を輸入するようになったこともあり、共同統治をした夫オレンジ公ウィリアム3世（在位1689年～1702年）と共に、メアリー2世（在位1689年～1694年）は、茶を一日に何度も嗜み、陶磁器も愛で、蒐集し、その習慣はまた違った角度から広く貴族達に親しまれるようになる。妹のアン王女（在位1702年～1714年）も“ブランデー・アン”と揶揄されたりもしているが、毎朝の飲み物としてエールより紅茶を好んだことから紅茶の人気を後押しすることとなる。さらに、19世紀、ヴィクトリア女王の治世（在位1837年～1901年）にベッドフォード公爵夫人であるアンナによって広がったとされるアフタヌーンティーの習慣は英国の紅茶を嗜む代表的文化として広く世界中に知られている。

これらの紅茶の習慣は主に女性の社交に次第に使われ、時代を経てやがてそれが庶民にも伝わるようになっていく。

一方コーヒーは1650年、英国初のコーヒーハウスがオックスフォードに開店して以降、各所で男性の公共的社交場として成り立っており、多くの教養と知識と情報を1ペニー（入場料が1ペニー、コーヒー代が1ペニー）で得られると好評で、ペニー大学として認知されていた。ここではコーヒーのほかに紅茶やチョコレートも販売されており、女人禁制であるがゆえに男性のみの特権として嗜好品をお伴に多くの議論が交わされていた。その後、コーヒーハウスでの言動は過激思想を持った者による革命の温床となると憂慮したチャールズ2世（在位1660年～1685年）により、1675年、一次的にコーヒーハウス閉鎖令が出されたりもした。それほどその隆盛ぶりは華々しかった。18世紀初頭にはロンドンには既にコーヒーハウスは3000件を越えて存在しており、コーヒーを軸とした男性文化が確立していた。

コーヒーが男性のみの特権として与えられていたのとは別に、紅茶文化は女性だけでなく男性も大いに享受するところがあったようで、男女共に会する機会も度々あり、その様々な嗜みの心得や食卓芸術への造詣の深さが紳士の教養の深さとして認知されるようになっていった。

現在、世界で最も紅茶を飲んでいるのはアイルランド人と英国人とニュージーランド人である。英国人の現在の一人当たりの年間紅茶消費量は2.6kgと以前よりは減少傾向にあるというが、それでも一人当たり1日に5～6杯の紅茶を飲んでいるとなると、やはり、紅茶がこの国の代表的イメージ作りを裏付けていることの理由ともいえる実数として承認できるといえよう。

一方、紅茶の年間消費量の減少は、アメリカ式コーヒーショップの台頭による、コーヒーの浸透が大きな要因といえる。街にはアメリカ系、イタリア系のコーヒースタンドが目立つ。若者の紅茶離れともいえる動きが街の様子からも伺える。

フランスのコーヒーと紅茶文化の外郭

英国が紅茶の国と評されるのと同様、フランスはコーヒー（カフェ）の国としての認知度が高い。

実は紅茶はイギリスより先にフランスに伝わったのであるが、時代を経て、英国ではその植民地で紅茶の栽培が図られ、王族達の後押しもあり、紅茶に注目が集まった。一方フランスは独占資本先のプランテーション事業でコーヒー栽培に注力した。フランスで紅茶は英国のそれのように王族の後押しがあったわけでもない。政治的思惑も絡まり、また、18世紀にフランスが独占した西インド諸島産のコーヒーがイエメン産のモカより安く大量に販売され、コーヒーの消費が広まったことから、紅茶ではなく、コーヒー（カフェ）の国としてフランスは認識されていったとの見方もできる。

先にも述べたが、そもそもコーヒーは16世紀半ばオスマン帝国支配による影響で中近東・アフリカ・東欧に伝えられ、その後、教皇クレメント8世による1605年のコーヒーの販売の許可がおりてから西欧諸国での本格的展開が始まった。

フランス最古のカフェプロコプ（現在でも営業中）は1689年開店し、あらゆる階層が出入りし、情報交換の場として活用された。18世紀はパリのカフェの最盛期で、政治家、哲学者、芸術家達がそれぞれの主たるカフェを拠点に様々な展開が繰り広げられるようになったのである。

だが、イギリス同様、フランスでも女性がカフェに自由に出入りするべきではないとされ、女性たちはカフェとは別のおしゃべりの場を作り出すこととなる。それがサロン・ド・テである。サロン・ド・テではお菓子がつきものとされるが、フランスの菓子文化が花開いたのも、西インド諸島における砂糖の大量生産が絡まるとも考えられる。つまり、フランスの嗜好品文化は西インド諸島を中心に華やかに開花したともいえよう。

さらに、現在の英国のコーヒーの顕著な伸びに対し、フランスではにわかに紅茶の消費量が上がり、サロン・ド・テが活況を呈している。1977年120gだった紅茶の年間消費量は1997年200gに。これだけ見るとそれ程の伸びとは思えないかもしれないが、ここ数年の伸び率は過去にみない速さで、確実にティーの文化が浸透していていることが読み取れる。フランスにおけるサロン・ド・テの設えは非常に華やかで、英国のアフタヌーンティーの形式に似ているものの、あえてフランスらしさを醸し出そうとしている節が見られる。これからも英国・フランス両国の紅茶を介する微妙ながらも深い繋がりが想像できるのである。

フランス王室と英国王室の系譜にみる茶の繋がり

英国に茶の文化をもたらしたキャサリン・ブラガンザはポルトガルのブラカンザ家の出である。

欧州に紅茶が広まったのは、オランダ人による買い付けの功績、オランダ東インド会社の席捲が大きかったといえようが、ポルトガルではそれより悠に、1世紀も前から茶を嗜む文化を

知っていたというのは先にも述べた。これはイエズス会の宣教師達からもたらされた日本の茶の湯から得たもので、ポルトガルの王侯貴族達はオランダが商業的に茶を用いて買い付けていったのとは別の次元で、つまり利財を得るための手段としての茶ではなく、「茶の精神」を静かながらもじっくり取り入れ嗜んでいたと言える。

王家とはいえ、ブラガンザ家は欧州では新参で、諸国からは伝統の王室とは一線を隔されていた。ブラガンザ家が王室を築くことになったのは、ポルトガルの正統王家が途絶え、スペインに併合されていたところを、ブラガンザ家が中心となり再び独立を勝ち取り王家に担ぎ上げられたという経緯がある。つまり、そういった経緯から自身、新参の意識が高かったブラガンザ家はポルトガルの財力を盾に有力王室と縁組をしたがっていたのである。

当初ブラガンザ家はルイ14世との縁組を期待していたが、ルイ14世はその申し出を断り、自分はスペイン王室のマリー・テレーズ（共にフェリペ3世とハプスブルグ家皇女のマルガレーテを祖父母に持つ従兄妹同士）と婚姻を結び、代わりに従兄弟のチャールズ2世（共にアンリ4世とマリー・ド・メディシスを祖父母に持つ従兄弟同士）にこの縁組を取り持ったといわれる。ルイ14世とチャールズ2世は大変親密な関係であったのだ。

チャールズ2世は父チャールズ1世がピューリタン革命の露と消えた後、母のマリアがフランス王室の出身であることからフランスで亡命生活を送っていた。そのフランスの地で彼は様々な社交と快楽を覚え、好色男として英国王室史を飾る人物とされている。事実キャサリンとの間に子供はなかったものの14人の庶子を13人の愛人との間に設けている。品行が良いとは言いがたいが、彼の社交的要素は国民に人気の的で、“陽気な王様”として王政復古により英国王として即位することとなる。王妃キャサリンは、王の女性好きの憂さ晴らしに喫茶に傾注していたとも言われるが、互いにカトリック教徒の二人は、実はそれなりに仲が良かったとも言われている。王も王妃同様紅茶好きで、王からの贈り物として賓客の手土産に度々紅茶を用いていたという記録が残っている。つまり、ポルトガルによる確固たる茶の風習を背景に英国の特産としてそれを広める画策がキャサリンとチャールズ2世の二人によりなされていたのかもしれない。

キャサリンが持ち込んだ紅茶と喫茶の風習がこの後の英国・アメリカに様々な影響力を持つことを考えればこの展開は非常に大きな意味を持つ。

一方、ルイ14世は太陽王として君臨し、その勢いは留まることを知らないほどであった。スペインとの姻戚関係、イギリスとの姻戚関係、そして、イタリアとの姻戚関係。それぞれを巧みに主張しながらフランス王室の権威を高めようとしていたルイ14世はチャールズ2世の婚姻にもその政治的考えを潜ませていたようにさえ思われる。そのことは各国の継承絡みの戦争を数多く仕掛けた彼の行動からも読み取れる。

フランスでのサロン・ド・テの設えでアカンサスの葉や花綱、貝などが用いられているがこれは、バロックとロココに共によく用いられるモチーフで、フランスにおいて茶が宮廷内で流

行っていた名残が現れているとも考えられる。

英国の茶の文化に絡む食空間様式

ここで、英国の紅茶史に大きな影響を及ぼした、キャサリン・ブラガンザのチャールズ2世、メアリー2世、アン女王、アンナ・マリア・ベッドフォードのヴィクトリア女王期のそれぞれの室内装飾の特徴を家具の特徴、特に“玉座”ともいうようにその様子をつかみ易い、椅子の装飾を中心に見てみることにする。

チャールズ2世期は後期ジャコビアン様式といわれる。この後期ジャコビアンはフランスの影響を大いに受けたチャールズ2世がフランドル後期ルネッサンス様式とフランスバロック様式を導入し、この二つの様式を混合したもので貫や脚、肘などに渦巻きやねじりろくろが多用され、各所に王冠が彫刻された椅子などが特徴的に配される時代である。椅子の張り地もビロードでくるんだり、寄木細工なども見受けられる。

このすぐ次のステージに、ウィリアム3世&メアリー2世のウィリアム&メアリー様式がくる。これはオランダのオレンジ公であるウィリアムが王位に就いたことでオランダの影響を大いに受けたもので、素材はウォールナットが多く、椅子の背は透かし彫りで曲線が増え、テーブルやチェストの足は鐘の形、いわゆるベルフットや蛇腹型の貫が使われ、座や背は籐の張りが増えるようになる。形は女性的で、小型で装飾的で、軽快なものが多いのも特徴的である。

アン女王の時代の様式はクイーン・アン様式とよばれ、ウィリアム&メアリー様式よりも彫刻が増え、背板は流れるような曲線模様を描いたすかし彫りが多くなっている。座面は角が丸くなり、ルイ14世のスタイルを残し、脚部は猫脚になっている。安楽椅子いわゆるウイングチェアもこの時代生まれ、この時代のウイングチェアは、フランスバロック風の美しい曲線と豪華さを兼ね備えている。

ベッドフォード公爵夫人アンナはヴィクトリア女王期いわゆるヴィクトリアン様式にあたる。ヴィクトリア女王時代はゴシックの直線的な構成に猫脚が取り入れられるなど、ゴシックやルネッサンス、ロココ、ジョージアン様式を基調とした混乱期ともいえる。ヴィクトリア期は大きく三つに分けられ初期（1837年～1850年）はルイ14世様式とルイ15世様式の混合にエリザベス様式とゴシック様式が入り混じった誇張された様式が特徴といえる。中期（1851年～1875年）はネオバロック様式やネオゴシック様式の折衷式で、装飾過剰な形となる。後期（1876年～1901年）はいろいろな時代の様式が一つの家具の表面に取り付けられたことからフリールネッサンス様式といわれる。また、スプリングの開発により、椅子は大きな張り包み椅子がヴィクトリア期の特徴となった。このほか、二つの低座椅子の背を合わせた組み合わせ椅子、組み合わせた椅子を合体して鳥にしたように見えるアイランドチェア、2～3人が便利に会話ができるようにデザインされた会話椅子、背の形が気球のような形のバルーンバックチェア、紙に接着剤・糊・砂などをまぜあわせたものを鋳型に流し込んで圧縮形成して複雑な形を作り、

その表面に漆や象嵌などを施すことによって贅沢な装飾を施すことができたパピエ・マーシュの椅子などバリエーションが豊かな物が作られるのもこの時代である。

これらの様式の変化を見てみてもわかるように、紅茶のある食卓風景には少なからずフランスの影響があることがわかる。

では、フランスにおける茶を嗜む文化の食空間環境はどのようなものであったのか、次に見てみる。

ルイ14世以降のフランスの食卓空間様式

もともとローマで生まれたバロック様式はルイ14世様式としてフランスで開花する。家具には象嵌を多く使い、べっ甲と真鍮の型抜きや象嵌、木彫りに金箔を押す手法も用いられた。椅子類にも装飾は増え、曲線が多くなり、次第にロココ様式へと移行する。続く、ルイ15世のロココ様式は宮廷やサロンで愛用され、貴婦人たちの社交生活に適した華やかなものになった。女性的な曲線主体のデザイン、色彩はライトグレーイッシュやクリーム系の淡いものや白地に金箔などを押したものが増え、軽いタッチの華麗なものが好まれた。これらのことから、18世紀初頭のベルサイユを中心とした午後5時ごろにケーキをはじめとするお菓子類と紅茶を貴婦人たちが宮中で楽しむ習慣が広まっていったことから、紅茶の高価さも相まって、ロココ＝貴婦人＝紅茶というイメージが確立し、フランス・ドイツ・イタリアでは気取った飲み物と受け取られがちであった。

一方、コーヒーやチョコレートの流通のほうが盛んであったのは、その産地が欧州と比較的地理上紅茶より近距離であったこと、飲料として導入された時期が早かったので、紅茶よりはるかに前にプランテーション事業の取り組みがなされ、紅茶より安価に広い階層に行き渡った経緯があげられる。利用者層が広いということはそれだけスタイルは多様性を帯び、紅茶のように一定のイメージが付きまとうものではないのである。特にコーヒーはその国の人々の味や好みに合わせた器具を開発するという工夫も凝らされたことで、多種多様性を帯び、あらゆる階層の多くの人たちに定着していったからといえよう。

ここに、紅茶とコーヒーのスタイルの対立軸が成立することとなる。

紅茶・コーヒー現在の潮流

紅茶の国といわれる英国では先にも述べたように紅茶離れが進んできている。

朝はカフェオレとクロワッサンといわれるようにコーヒー文化ともいえるフランスではサロン・ド・テの習慣が女性たちを中心に花開いてきている。

英国とフランスは概念的にあまり仲が良くないといわれているが、文化的にみれば双方がそれぞれをけん制しあいながら独自の文化としてそれぞれを開花させようと刺激した結果、時を経て今、昇華されたものが個人レベルで選択され伝統と革新で展開されているといえよう。

しかし、そのスタイルをみると、やはり、脈々と受け継がれた DNA を感じさせるのか、英国以外では未だ紅茶は気取った、スノップなどというくだりを禁じえない飲み物であるというのが諸外国の総論である。

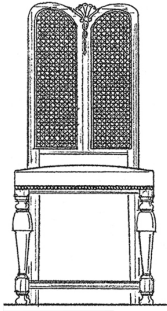
現在、英国は英国で、ロンドンの街中ではアメリカ系・イタリア系のコーヒースタンドが区画ごとに林立している。ここには若者やビジネスマンが多く集い、もはやブレイクはティーではなくてコーヒーという状態といっても過言ではないかもしれないような状態である。一方、紅茶を外でとっているのは年配の婦人達か有閑マダムと思われる層が多く、ホテルやティールームでアフタヌーンティーマニューを注文する若者は、観光客を除いてめったにお目にかかることはない。

では、全く紅茶は若者の日常からは排他されているのかということとそういうわけでもなく、家では紅茶、外ではコーヒーという棲み分けがなされているようである。かつて英国人は一日に紅茶の時間を8回も設けその度ごとに数杯の紅茶を飲むとされていたが、英国における紅茶消費量の減少はその8回のうちデイトイムのイレブンジズ～ミッドティーブレイク（アフタヌーンティー）の3回分がコーヒーに入れ替わったと考えればその減少傾向はうなずけるところである。総じて見てみると現在の英国での紅茶の位置づけは（1）家で飲むのも（2）年配の飲み物とさえ受け取れるのである。

また、ミュージアムカフェにおけるティーマニューのアフタヌーンティーセットは現代風にアレンジされ、シンプルな白の厚手の食器にティーサンドウィッチと、キャロットケーキなどのシンプルなケーキもしくはスコーンのいずれかを選んで供するというような省略型が多くみられ、これらの食器は何の装飾もないものになってきている。つまり、アフタヌーンティーを日々のものとして据えるなら、貴族趣味の凝った食器や時間をかけてとるような何種にも及ぶ豪華なティーマニューは合理的ではないという結論による変化と見て取れよう。紅茶にかかわる食の文化として ①マイセン窯を機にする、ヨーロッパ各地での大量磁器生産による磁器の普及 ②セイロンでのコーヒー栽培がサビ病により全滅し、紅茶栽培へとその転換を余儀なくされた ③ボストン茶会事件の三つの事・事件が大きく関わっているといわれる。この中の①がアフタヌーンティーの慣習では今も即座に目にし、感じ取れるものであったが、貴族趣味的陶磁器の使用こそ、現代の実生活とはかけ離れているという見解からか、自然と日々からその使用はなりを潜め、新しいスタイルが台頭してきている。

しかしながら、ティーマニューとして名を残し続けるのは“アフタヌーンティー”という響きそのものが、英国の文化を表現する利を得るものとして英国人が認識しているからに他ならないといえよう。

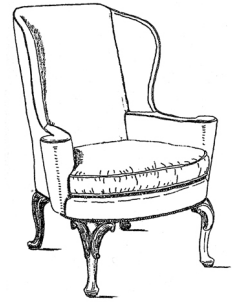
紅茶そのものはもはや高級なものではなくなっている。が、それを供するのに用いる（用いた）調度品のインパクトが極めて大きく、残影としてその文化的影響力を受け今に至る“社交的嗜好品”それが紅茶ということで、ひとまず締めくくりたいと思う。



バロック ウィリアム&メアリー様式の椅子



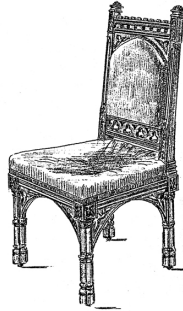
ロココ クイーン・アン様式の椅子



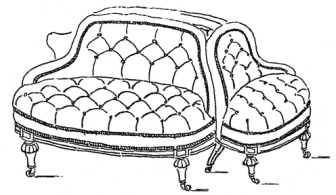
ロココ ウィングチェアー



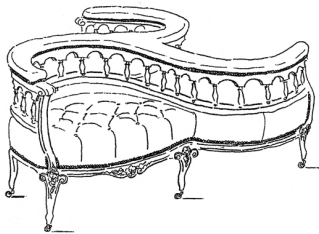
19世紀初期ネオエリザベス様式の椅子



19世紀中期ネオゴシック様式の椅子



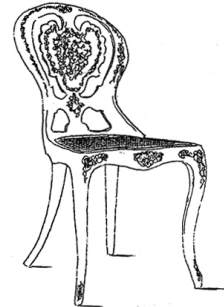
組み合わせ椅子



会話椅子



バルーンバックチェアー



パピエ・マーシェの椅子



バロック ルイ14世様式の椅子



ロココ ルイ15世様式の椅子

宮廷社交から現在に至る英仏両国における紅茶による社交文化様式の変遷

参考文献

洋家具の歴史と様式 中林幸夫 理工学社
世界の王室 鈴木晟 日本文芸社
食の文化を知る事典 岡田哲 東京堂出版
IOC 統計 嗜好品の消費量 2010年2月
FAO 「Current Market Situation and Medium Term Outlook」2006年12月

絵の引用

椅子の絵はすべて 洋家具の歴史と様式 中林幸夫著 理工学社のもを引用しました